

〈URL〉 <http://www.peshawar-pms.com> (4月よりHPのアドレスが変わりました)

〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



表紙絵 チャプルサン/画・甲斐大策

●緊急特集 大干ばつ2018年

深刻化する気候変化 沙漠化と豪雨被害の中、灌漑地が唯一の希望に	中村 哲
緊急干ばつ報告! アフガニスタン、空前の規模の大干ばつ	中村 哲
アフガニスタンにおける水事情と灌漑の重要性 2010年の提言(会報105号より)	中村 哲
誰もが不可能と思っていたガンベリ沙漠に水を引く	アブドゥル サープル サードト
24時間体制で1日200名の患者	ハフィズツラー
PMS訓練所の受講生によるトレーニングの感想	
“不都合な真実”に向き合うために	初井孝文
【カラー特集】大干ばつの現状とPMSの取り組み	

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

深刻化する気候変化

— 沙漠化と豪雨被害の中、灌漑地が唯一の希望に —

PMS（平和医療団・日本）総院長／ペシャワール会現地代表

中村 哲

□ 空前の規模の干ばつの再来

みなさん、お元気でしょうか。

今年も日本も世界も災害で荒れました。

私たちの周りでも、集中豪雨、異常高気温、大型化した台風が襲い、自然の猛威を肌身に感ずる時代を印象づけました。国外でもあらゆる場所で天変地異が起きました。

これまで会報等で訴えてきたように、アフガニスタンでも気候変化は深刻化し、今年はまだでダメ押しのように、空前の規模の干ばつの再来となっています。国連筋によれば被災者が一〇〇〇万人を超え、餓死の危険百数十万と見積もられています。すでに今春から国連機関・アフガン政府を筆頭に、必死の救援が続けられていますが、冬を目前に犠牲が増す可能性が高くなっています。

□ 用水路も保身に青息吐息

二〇〇〇年以来、私たちPMSはペシャワール会の全面支援の下、「百の診療所より一本の用水路」を合言葉に、その備えに力を尽くしてきました。その結果、東部アフガンの一角に安心して住める地域を復活させたのは確かですが、圧倒的な自然の前には力不足を感じざるを得ません。沙漠化だけでなく豪雨被害も勢いを増しているのが近年の特徴で、既存のマルワリード用水路も保身に青息吐息の状態となりました。

しかし、私たちが「緑の大地計画」で築いてきた安定灌漑地Ⅱ六〇万人の農村地帯は、周辺農民の唯一ともいえる希望となっています。更に、アフガン東部で多くの周辺被災者がこの地域に逃げ込み、かろうじて職を得て生きているのを見ると、責任の



ベラ村の浸食を止めたマルワリードⅡ5.6km地点の護岸。低水位期になって石出し水制による著しい河床低下が見られる。ミラーンでの経験は大きく、この護岸方式が浸食対策の定番となっている（2018年10月29日）

大きさを自覚せざるを得ません。災害の質に変化の兆しがある現在、PMSは新たな保全態勢を敷くと共に、敵対よりも協力を呼びかけ、安全な生活圏拡大を目指し、干ばつと対峙し続けます。力を合わせれば、決して不可能なことではありません。

温暖化による災害が世界中で起き、アフガニスタンだけが被災地ではありません



カマ第一堰改修は予定通り進んでいる。今回は砂州との接合部の工夫が主題の一つだ。全体に手際よい作業工程で、作業員は巨礫の取扱い、砂利の活用に習熟している（2018年10月28日）

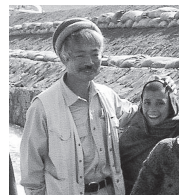
[上] マルワリードⅡ堰。造作後2年を経て、ほとんど目立った変化が見られない。本堰は地理条件にも恵まれて、最も安定した堰である。岩盤下流側は著しい土砂堆積が問題であったが、水門付近の砂利吐きが奏功している。（2018年9月24日）

が、人間共通の課題としてこの問題に向き合い、ご理解を賜りたいと存じます。
 これまでの温かいご関心と多大のお支えに感謝します。
 良いクリスマスと新年

年をお迎えください。

二〇一八年十二月

ジャララバードにて



中村 哲：九州大学医学部卒。専門は神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て一九八四年パキスタン

ン・カイバル・パクトゥンクワ州（旧北西辺境州）の州都ベシャワールに赴任。ハンセン病コントロール計画を柱にした貧困層の診療に携る。八六年からはアフガン難民のための事業を設立し、アフガン北東山岳部に三つの診療所を開設。九八年には基地病院PMSをベシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大干ばつ対策のための水源確保（井戸掘り・カレージの復旧。作業地千六百カ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を開始。〇三年三月からは灌漑水利計画に着手し、一〇年三月全長約二五キロが開通。ダラエメール診療所の年間診療数約四四、五〇〇人（二〇一七年度）。

緊急干ばつ報告!

アフガニスタン、空前の規模の大干ばつ

PMS (平和医療団・日本) 総院長 / ベシャワール会現地代表

中村 哲

◆三年続きの少雨

「アフガニスタンではカネがなくとも暮らせるが、雪がなくては暮らせない」とは、有名な諺である。アフガニスタンは山の国で、ヒマラヤ・カラコルム山脈に連続する世界の屋根の西端に当たり、国土の大部分が七〇〇m級の高山をいたたくヒンズークシ山脈に覆われる。二五〇〇万人といわれる国民の八割が農民で、山間部の狭い土地でオアシス的な農業が営まれる。農業を支える水の大半は高山の雪解け水で、川沿いに豊かな恵みを約束する。雪は巨大な貯水槽で、アフガニスタンの生命線である。冬の積雪次第でその年の水の状態が決まる。冬の厳しさの分だけ、夏の恵みを期待できるのだ。

二〇一八年春も、暖冬に加えて少雨が続いた。すでに三年目である。人々は不安気

に高山の白雪を仰ぎ始めた。既に起きていた大地の乾燥化が加速度を増していた。四月、ユニセフ、WFP (世界食糧計画) などの国連機関が一斉に注意を呼びかけた。「餓死線上一〇〇万人」、「数十年に一度の規模の大干ばつ」で、アフガン国民の三分の一に相当する九〇〇万人〜一二〇〇万人に影響が出ると警告、国際NGOらが救援を訴え始めた。

実際には二〇一四年の段階で「飢餓人口七六〇万」(WFP)とされ、飢餓は慢性化していた。そこに二〇一六年、一七年、一八年と連続して異常少雨による不作が重なり、問題が俄かに急性化したのである。

雨は殆ど降らず、大都市カブールも深刻な水不足に陥った。犠牲と被害予測は月を追って増え、一〇月、OCHA (国連人道問題調整事務所) は、「緊急層」三三〇万、「危機的状況」八三〇万人と飢餓の急増を訴えた。水不足は全国に及び、全土の三分

の二、三四州中二〇州に食糧危機警報が発せられている。空前の規模である。ここで東部を中心に、現在までの動きを概観し、我々の展望を伝えておきたい。

◆西部・南部で難民化二六万人

今回、少雨の影響をじかに被ったのは大河山のない南部と西部である。六月から七月にかけて、アフガン全土が熱波に見舞われ、連日観測記録が更新された。西部のヘラート周辺、南部のヘルマンド、フアリャブ、ニムローズ州などの各地で住民が村を捨てて難民化し始め、その数二六万人とBBC放送が報じた。現在ヘラート周辺でテント生活を余儀なくされているのはこの集団であるが、これは氷山の一角で、その何倍もの予備軍が農村にとどまっている。

南部全域の水源を成すヘルマンド川の水量が激減し、同流域であるカンダハルの地下水利用のカレーズも影響が伝えられ始めた。地下水位は軒並み一〇〇m以上、場所によっては二〇〇mに下降、飲料水の欠乏も起き始めている。一〇月、反政府武装勢力のタリバン指導部が異例の布告を出し、国際支援団体に難民の緊急救済を訴えた(タリバン農業牧畜サカート委員会・二〇一八年一〇月)。これも今までになかったことだ。



難民帰還で混雑するジャララバード市内（2017年4月5日）

パクティヤ、パクティカからの他の南部諸州も長い間水不足に悩んでおり、難民を受け入れるゆとりがないのが現実である。WFPを筆頭とする国連団体とアフガン政府が緊急食糧配布を実施しているが、被害は拡大しつつあり、焼け石に水であるのが実情である。

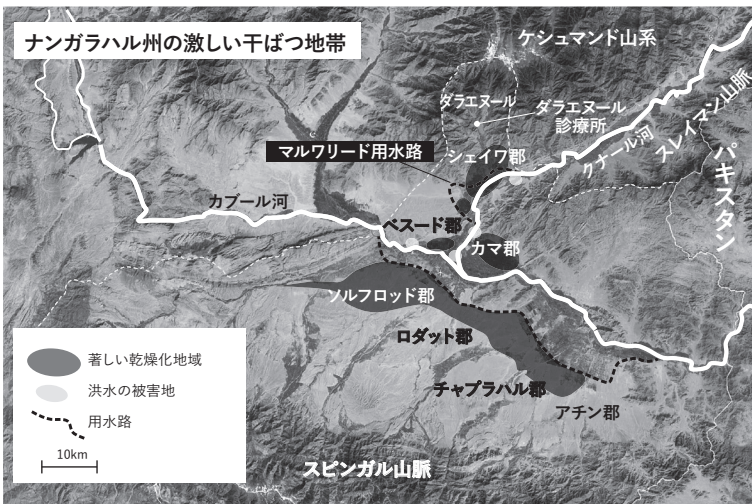
◆東部に被災地から人口集中

東部のナンガラハル州では、既に一八年前の大干ばつ以来進んでいた農地の乾燥化が更に進んだ。スピנגアル山脈・ケシュマ

ンド山脈方面の農村地帯（地図参照）——アチン、ロダット、ツァプラハル、ソルフロッドの各郡の大半が土漠と化した。これらは四五〇〇m以下の「低い高山」の現象であり、ヒンズークシ山脈の七〇〇〇m級の山々を源流とする大河、クナル河は安泰であろうと考えられていた。しかし、昨冬の段階から河川水量の異常パターンが記録され、高山の融雪に異常が起きていることが示唆されていた。前後してヒンズークシ山麓のヌーリスタン各地で湧水が涸れ始め、食糧危機が発生したことが伝えられた（FAO国連食糧農業機関・二〇一八年二月ワールド報告）。

一八年前に大干ばつを体験していた我々は、ジャララバード北部農村地帯で「緑の大地計画」（二〇〇三年）を実施、現在までに九カ所の取水堰と計数十kmの主幹水路を建設し、広範な地域で安定灌漑による干ばつの備えをしてきた。この結果、バスロード、カマ、シェイワ各郡で計約一六〇〇〇畝の安定灌漑地を確保し、六〇万人の生活を保障した。

これを範として隣接地域で農地の回復を計画していた矢先、三年ほど前から同地域内で人口の異常な集中が観察されていた。州内の被災地からたき出された人々が、隣接のラグマン州、クナル州からの人の流れと合し、職を求めて殺到した。ジャラ



ラバード北部の一〇数キロの国道は、突然出現したバザールが林立し、閑静だった郊外に雑踏を作り出している。零細の露天商、季節農業労働者、作業員、リキシャの運転手など、不十分ではあっても、なにがしかの職にありつけるからだ。いつもなら多くの者がパキスタンに職を求めていくが、パキスタン自身も記録的な干ばつで窮し、二年前からアフガン難民の強制送還を進めて

いる状態だ。ジャララバード周辺に流入した東部の国内避難民は、優に一〇〇万人を超えらると思われる。

最近の一連の人の流れは、もはや他に逃れる場所がないことを示している。今や東部最大の人口を擁するナンガラハル州でも、高山のごく限られた小村落、ソ連時代に建設されたカプールのドウルンタ・ダム流域、PMSが建設したクナル河沿いの堰周辺のみが辛うじて残り、これ以外にまともに耕せる農地が消滅してしまった。我々の不安は恐怖に変わりつつある。

◆干ばつはニュースの死角

かくて二〇〇〇年夏の大干ばつを凌駕する大災害が次第に明らかになってきている。一連の出来事は、事情を知る者にとって世界の終末さえ彷彿とさせる。しかし、干ばつはニュースの死角で、あまり外部に知られることがない。

干ばつは時に国家の存立さえ脅かすが、地震や戦災のような緊急のイメージに乏しい。怒濤のような難民の群や、バタバタと目の前で人が斃れるような衝撃的な場面がなく、人口移動が緩慢に起きる。人々はすぐに村を空けるのではなく、先ずは外部への出稼ぎで家族を養い、飢餓を解消しようと努める。死亡は栄養失調が背景にあり、病死とされ

ることが多く、餓死という病名はない。これら数カ月、時に数年をかける緩慢な過程は、事件としては報道されにくい。

さらに、アフガニスタンは気候の統計記録がほとんどなく、温暖化被害の例としては説得力に乏しかった。報道関係者が短期滞在しても、それ以前の変化が分からないから、「こんなものだ」で済まされる例が少なくない。実際に飢饉を体験したことのない人々には、干ばつはなじみが薄く、想像しにくい。

我々PMSの灌漑事業でさえ、「沙漠の緑化」という牧歌的なイメージで見られる。公園作りに来ているのではないが、「飢餓対策」という切羽詰まった事情は、都市空間で育った人々にはしばしば伝わり難い。干ばつといっても、オーストラリアや北米の大農園が不作だったというのと意味が違う。食糧という商品が失われるのではなく、生活と生命が失われるのである。

◆伝わらない干ばつの悲劇

戦争の報道も紛らわしい。二〇〇一年九月一日のニューヨーク同時多発テロ以来、アフガニスタンは「対テロ最前線」と位置づけられてきた。かつてアルカイダを匿った旧タリバン政権が敵視され、同年一〇月米国が報復爆撃を強行、欧米軍がタリバ

ン政権を駆逐してカルザイ政権を擁立した。その後「アフガン復興」が世界的な話題となり、巨額の資金がつけ込まれたが、期待された成果には至らず、治安が一層悪化し、一時は外国軍兵力一二万人まで膨れ上がった。二〇一六年に約一万人を残して欧米軍（国際治安維持部隊）はひきあげたが、内戦はいよいよ激しく、過去最悪の状態にある。人々の困窮が専ら戦火によってのみもたらされたような印象を与えたことは否めない。

最近では危険地帯として報道関係者の出入りが制限され、安全対策を強調する余り、実情が更に伝わり難くなっている。復興を阻む主な理由が内戦による治安悪化とされ、干ばつに焦点が当てられなかったのは、アフガン人にとって悲劇であった。実際には、二〇〇〇年以来、干ばつは動揺しながら進行していた。かつてタリバン政権の弱体化も干ばつが大きく関与していたが、このことは当時から殆ど問題にされなかった。麻薬地帯や治安の悪い地域は完全に干ばつ地図に一致している。出稼ぎの仕事の一つが傭兵で、みな家族を養うために、仕方なく銃を握らざるを得ないのだ。

◆PMSの対策と現状

既述のように、PMSの転機は二〇〇〇



ガンベリ横断路の浸漬。黒い泥土が堆積している。泥土は有機物を含み、肥料として貴重（2018年10月16日）

年に発生した大干ばつで、二〇〇三年から「緑の大地計画」を打ち出してジャララバード北部穀倉地帯の復活を計画、第一弾として二五kmの用水路建設を開始、沙漠化した農地の復興に努めた。初めはカレーズの復旧を手掛けたが、地下水位の著しい低下に遭遇、大河水クナル河からの取水が主な取組みとなった。

ところが気候変化の影響は地下水減少だけではなかった。河沿いで洪水と濁水が同居し、各地で取水困難が続いていることを知った。急流の大河川は更に暴れ川となり、しばしば洪水が村々を襲った。水が豊富なはずの川沿いでも、農民が難民化し、廃村

が拡大しつつあったことを知った。このため二〇一〇年からは既存水路の復活と洪水対策を大きな課題とし、クナル河沿いに八カ所、カプール河沿いに一カ所、取水堰を建設し、併せて洪水対策にも力が注がれた。この結果、二〇一八年現在までに計一五六〇〇畝の農地に安定送水できるようになり、六〇万人の生活を保障できるようになった。

これを範としてアフガン政府、JICA（日本国際協力機構）やFAO（国連食糧農業機構）のアフガン事務所とも協力して、更に安定灌漑地を拡大すべく、「戦よりも食糧自給」をスローガンに掲げ、PMS方式の取水堰の普及計画が進められてきた。一NGOの手には負えぬ問題だと思われたのである。

◆温暖化で進行する乾燥化

確かに今回のように、少雨が干ばつに直結する傾向は当然あるが、必ずしもそれだけではない。過去、少雨が続きてもそれほど酷い事態が頻繁かつ長期に起きた訳ではなかった。我々が二〇〇〇年に川沿いの廃村の調査をした時、乾燥化は一般に五年、一〇年をかけて徐々に進行しており、少雨の続く時期に一気に荒廃したように見える例が多かった。いったん村民が難民化する

る。原因はひとえに灌漑用水の欠乏である。一般に農地の灌漑水源は、以下に分けられる。①カレーズ（地下水利用の灌漑路）、②ジュイー（小河川からの小水路）、③大河水からの取水堰に大別される。このうち、標高の低い山脈から流れる川が涸れるとジュイーの水が失われ、次いで地下水の減少が起きてカレーズが枯渇する。一方、七〇〇m級の高山を源流とする大河水では、取水困難は水量の減少ではなく、流れの不安定化——洪水や河床・河道の変化によって生ずる。濁水よりも、記録的な洪水が頻発して取水口や村落が荒廃し、村民が難民化した例も多かった。干ばつが洪水を伴って発生するのだ。

我々の観察では、高気温が少雨の影響を増幅する。局地の夕立や結露が減少し、広範な地域の水分がわずかな場所に偏在する。その結果、大部分の地域が乾燥し、ごく限られた地域に激しい豪雨がしばしば鉄砲水を発生させ、地下に浸透するゆとりを与えない。雪線の上昇と急激な融雪が加わり、地域の保水力が著しく低下、これに少雨が重なると乾燥化が一気に進む。ある程度は回復しても二度とは戻らない。そんな動揺をくり返しながら沙漠化が進んできた。今回の干ばつも、突然現れたものではなく、「長い過程の中の急性増悪」と考えるのが自然である。

アフガニスタンの年間降雨量は約二〇〇ミリ前後とされ、非常に少ないが、降雨降雪の絶対量が近年になって減少したという確証はなく、偏在と言う方が正しい。ヒンズークシ山脈やカラコルム山脈の雪線の著しい上昇と低い山脈の地下水の枯渇は、少雨よりも高気温による可能性が強い。最近の研究で、アフガン東部の温暖化は過去六〇年で一・八℃、実に他の二倍の速度で進んでいるという恐るべき報告※(河野 二〇一七)もある。

◆当面の対策(東部の例を中心に)

先ずは広く干ばつ問題の重要性が認識され、十分な研究と取組みが提唱されるべきだ。問題があまりに大きく、かつ捉えどころがないので、ややもすれば政治的ポーズや議論で終わってしまう。アフガン国内で出来ること、国際的に協力すべきことを分け、計画を具体化すべきかと思われる。どこに消えたか分からないような支援はもう止めるべきだ。

干ばつを直ちに解決するのは不可能である。これ以上の気温上昇を抑えることさえ危ぶまれている。世界中がCO₂排出規制で協力するのは当然だが、それに加えてアフガニスタンのような事例に何らかの救済措置を以て臨むべきかと思われる。つまり

援助内容を温暖化被害の脈絡の中で焦点を当て、当面をいかに凌ぐかという試みに取り組むべきだ。

対策は地域によって大きく異なるが、アフガン東部に関する限り、大河川の水量はそれほど減つてはいない。隣国に大きな影響を与えない規模の灌漑施設で、農業生産を回復することがまず試みられるべきだ。いわば地域の延命策である。全部が水の恩恵あずかに与らなくとも、健在な地域があれば、そこでなにかしかの職を得ることができる。国外への流出を減らし、食糧価格高騰の防波堤となり得るのは、我々の試みが示す通りである。

この他、我々が望みをつなぐ手段として、乾燥に強い作物がある。荒地でも簡単に栽培できるサツマイモを試みているが、いまだ研究・試行の段階にとどまっている。

◆人と人、人と自然の和解

確かに温暖化については異論があり、「それほど危機はない」とする意見も根強い。我々は地獄の淵に立っているのか、アフガンで垣間見る終末的な現状が果たして日本の将来になるかどうかは、その時になってみないと分からない。しかし、それを否定して世界とアフガニスタンの現状を放置することが正しいとは思えない。たとい温暖

化の極端な推論が誤っていたにせよ、現在世界中で描かれる対策は、単にCO₂排出を規制して気温を下げるにとどまらない。化石燃料を基礎に作られてきた近代的生産を問い直し、大量消費⇨大量生産のいたちごっこを絶ち、持続可能な安定した社会と安全な自然環境を実現しようとする建設的なものである。また、それ以外に未来を描き得ないほどに、切迫した事態が伝えられている。そして、それは努力次第で可能だと多くの識者は述べている。

ここまで相互依存が深まった世界で、アフガン内戦の平和的解決も重要である。戦争は最大の消費かつ浪費である。紛争の遠因が経済活動や地球温暖化、干ばつと関係しあっているなら、その取り組みを通して、世界の融和と安定に寄与することにもなる。「テロに屈せず」と称して、徒に拳こぶしをあげるのものはや時代遅れで、解決にならない。

地球規模で進行する将来の危機を考えると、我々の進むベクトルが何れに向いているかで、破壊か安定かの道筋が決まっているのであろう。その意味では、アフガニスタンの大干ばつは極東の我々にとっても決して他人事ではない。我々が干ばつのアフガニスタンで「人と人の和解、人と自然の和解」を説く理由もここにある。

※アフガニスタン東部の干ばつ原因について 二〇一七 河野仁 kono 気象・大気環境研究所

【カラー特集】 大干ばつの現状とPMSの取り組み



2018年2月12日、「The Daily Outlook Afghanistan」が報じたアフガニスタン干ばつ被災のニュース写真



2000年に始まった干ばつ時には地下水が涸れ、井戸が涸れ、かろうじて川に残った汚染水を飲んで、多くの子どもたちが腸管感染症にかかった（2001年）



2018年10月6日と11月1日の2度にわたってケシュマンド山脈南麓の各地で集中豪雨が発生した。PMSの観察では2003年以来最大規模。マルワリード用水路は全域にわたって寸断された。ガンベリ排水路シギ方面の冠水した国道（2018年11月1日）



ケシュマンド山麓での集中豪雨による鉄砲水の土砂で埋まったマルワリード用水路（2018年11月1日）



カマ作業場より見るダラエヌール。10月6日の降雨は一時的に雪化粧をもたらし、淡い期待を抱かせた。一時的な雨で砂塵がなくなって、空気が澄み、冠雪のケシュマンド山脈が姿を現した（2018年10月9日）



上の写真の一週間後の様子。まだ気温が高く、雪は一週間で完全に消えた。再び河川水は急速に減少し始め、砂塵で遠くが霞み始めている。（2018年10月17日）



ベラ村に見渡す限りトウモロコシ畑が広がった。工期4年を予定したマルワリードⅡ用水路は大量の難民帰還を受け早期帰農を目指して、ターゲットの4カ村への送水を急ぎ目標を達成した。残務工事は2020年までに完工する予定（2018年9月29日）



ミラーン訓練所授業風景。2018年1月から始まったPMS方式普及計画の訓練生は約220人に達した（2018年10月25日）

アフガニスタンにおける 水事情と灌漑の重要性

—二〇一〇年の提言(会報一〇五号より)

PMS(平和医療団・日本)総院長／
ペシャワール会現地代表

中村 哲

二〇〇三年から始まった水利事業における大きな転機は二〇一〇年でした。中村医師はさらなる干ばつを前に警告を発するとともにPMSが進むべき方向性を示されました。この文書は二〇一〇年八月に「アフガニスタン支援検討会議」で日本政府に提言されたものです。アフガニスタンのナンガラハル州という一地域を基点にして、JICAとの共同事業として、水利事業を安定して拡大することの大切さを問いかけ、現在も微動だにしない確かな視点で記されていますので、再度掲載いたします。

(ペシャワール会会長 村上優)

□アフガン難民と干ばつ PMSの試みから

PMS(平和医療団・日本)は、元来医

療団体であったが、二〇〇〇年夏以降に顕在化した大干ばつに遭遇し、水利事業に勢力を注いできた。二〇〇七年まで井戸・カレーズなど、一六〇〇カ所の飲料水源を確保し、二〇〇三年からは農業用水路の建設に努力を傾注してきた。これによって数十万人の帰農を実現し、今も活動は続けられている。しかし、非政府組織としての限界も痛感している。

PMSでは、復活した村落の調査によって、マルワリード用水路灌漑域で一五〜二〇万人、カマ郡の灌漑路復活で一〇万人以上が帰農したことを確認している。その殆どは、パキスタンで難民生活をしていた者たちであった。

すなわち、少なくとも東部アフガンでは、戦乱や政治的迫害を避けて逃れた者も少なくなかったが、難民の大半が国際機関の指摘する「環境難民」であったことを裏付けている。このことは、WFP(国連世界食糧計画)やUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)ら、国連機関の信頼できる調査と一致している。戦乱の与えた影響は、唯に政治的混乱や国民の死傷にとどまらず、国家機関に依らざるを得ない水利工事が等閑視されがちであったことも、難民発生や治安悪化と無縁ではないと思われる。

□荒廃する農地、減少する食糧自給

中小河川に頼る農地の荒廃は、三〇〇〇〜四〇〇〇m級の万年雪の減少と密接に関



取水門を乗り越える2010年の大洪水。気候変化は渇水だけでなく、突発的かつ局所的な洪水を引き起こす(2010年7月30日)

係しており、用水路流域の調査によって三〇年以上前から徐々に進行してきたことが確認されている。アフガンの伝統的灌漑法・カレーズは地下水を利用するものであるが、地下水位もまた下がり続けており、吾々の作業地で二〇〇〇年八月から現在まで、一〇年間で平均約一〇〜一六m低下している。かつて豊かな穀倉地帯ナンガラハル州・スピングル山麓の村落は、この一〇年でことごとく廃村に帰した。

WFPは、二〇〇六年、アフガニスタンの食糧自給が六〇%を割ったと警告している。一昨年から続く世界的な穀物生産不足は、更に苦境を強いる状態となっている。

□国家的規模の支援の必要性

水利・灌漑施設の整備は、確かに長い年月を要するが、国民の八割以上を占める農民たちの死命を制する問題である。PMSが八年をかけて数十万の農民たちの生活を保障して地域の安定に寄与したとはいえ、これはナンガラハル州のごく一部のできごとにはすぎない。

国家再建は短兵急にはできない。時間をかけ、広範囲に実施されるべきである。吾々非政府団体の限界はここにあり、願わくばPMSのモデル的な試みが、然るべき

国家機関の手によって大規模に実施されることを望むものである。

□灌漑事業の可能性と日本の役割

乾燥化と気候変動が問題にされてはいるが、ヒンズークッシュ山脈の降雨・降雪の絶対量が極端に減ったわけではない。完全ではなくとも、以下のアプローチで臨めば、かなりの農地回復ができと思われる。少なくとも試みる価値はある。

①中小河川の緩流化（多数の中小貯水池の建設、洪水路の植林ら）による保水力の増強

②大河川からの取水（中小規模の堰と用水路建設）

なお、夏のクナルル河の流量は毎秒一〇〇〇〜一五〇〇トン、このうち三〇〇〇ヘクタールを潤す必要量は夏期で毎秒四〜六トン程度である。しかも再び河に戻す排水路を置けば、たとい多数の取水口を整備しても、下流に及ぼす影響は殆んど無視できるものと思われる。

アフガン農村は山間部でオアシス的な農業が営まれ、基本的に循環型自給自足の共同体であり、農業生産の大前提は灌漑である。水を制する者が根底から地域を制する。「水は生命線だ」とは、アフガン人なら全て、

政府・反政府を問わず、知識人から一農民に至るまで、自明の認識がある。日本がこの面で大きく寄与すれば、食糧自給率を飛躍的に上げ、必ずや多くの国民の生命を保護し、以ってアフガン社会安定の強力な柱を提供できるものと確信する。

さらに、年々増大する気候変動、洪水と渇水の極端な同居は、アフガニスタンとその下流・パキスタンを貫くインダス河流域全体の問題の一部でもある。環境問題Ⅱ人と自然との関わりについて、日本が一つの先鞭をつける意義は、測り知れない。都市空間と農村地帯との寛容な共存もまた、水問題に依拠していると述べても過言ではない。

規模が違うとはいえ、アフガンと日本の河川は共通点がある。河川の勾配が急で、夏冬の水位差が大きいことである。これに対して、わが国では昔から多大の努力が払われてきた。旧くは古代から現代に至るまで、営々と培われてきた豊富な経験と技術がある。これを生かすことの国際的な意味と日本の存在感は、今後も増加するであろう地球環境の激変の中で、決して小さくはないと思われる。現地PMSとしては、政府による灌漑計画の実施に全面的な協力を惜しまない。官と民、それぞれが相補い合いながら実施すべき日本の課題だと考えている。

◎現地スタッフからの便り

誰もが不可能と思っていた
ガンベリ沙漠に水を引く

PMS事務所責任者
アブドウル サール サール サータト

アフガニスタンと日本との友情には長い歴史があります。アフガニスタンではこれまで色々な政権が登場しましたが、日本との良好な関係が途切れたことはなく、日本人々は苦境にあるアフガニスタンの支援に努め、真の友情を示してきました。日本は政治的目的なしにアフガニスタンを支援してきた唯一の国です。これまでの変わ

らぬ支援に私からも日本の皆さんに御礼を申し上げます。

ご存知の通り、日本国はこれまでに直接あるいはNGOを通してアフガン国民を支援して来ました。PMSはそのようなNGOの一つで、これまで三〇年以上にわたりアフガニスタンで活動して来ました。はじめは医療分野で、のちに保健、水、灌漑そして農業分野へと活動を広げました。各分野の活動について報告します。

◎医療事業…PMSジャパンはダラエヌール郡カライシヤヒ地区で診療所を運営し、一日二四時間、地元住民に無料で医療を提供しています。一日約一五〇〜二〇〇名が治療を受けています。医師二名に加え、看護部、検査室、薬局、ワクチン部で合計一

四名が働いています。地元の人々は我々の医療サービスに満足しています。

◎水事業…アフガニスタンでは、大半の人が飲料水不足で家畜までも失ったため、故郷を離れ別の地域に避難を余儀なくされています。PMSではこの問題に対処すべくいくつかの対策を実施しました。まず、複数地域で井戸を手作業で掘削し、飲料水や灌漑用の水を提供しました。国境の町トルムでは、掘り抜き井戸(チューブウェル)を建設し、住民の飲料水不足を解消しました。

◎灌漑事業…二〇〇三年、PMSジャパンは水路の建設を決定し、マルワリード用水路と命名し、ジャリババ地区から着工し、ガンベリ沙漠まで完成させました。この用水路建設にあたっての測量は、アフガニスタン人と日本人のワーカー達で行いました。取水口はジャリババ地区に建設し、全長約二五キロの水路は水路沿いの住民達の農地を次々に灌漑しました。この水路建設の

中村哲医師の作品

アフガン・緑の大地計画

伝統に学ぶ灌漑工法と甦る農業 【改訂版】
Peace (Japan) Medical Services & ベシャワール会
B5判並製・256頁・オールカラー 1700円(税込)

医者、用水路を拓く

アフガンの大地から世界の虚構に挑む
【6刷】1800円

ダラエヌールへの道 【5刷】2000円

ベシャワールにて 【7刷】1800円

辺境で診る辺境から見る 【5刷】1800円

医者 井戸を掘る 【12刷】1800円

医は国境を越えて 【8刷】2000円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24
電話092(714)4838

人は愛するに足り、真心は 信ずるに足る

アフガンとの約束
中村哲/澤地久枝(聞き手) 2100円
東京都千代田区一ツ橋2-5-5
岩波書店 電話03(5210)4000

天、共に在り

アフガニスタン
三十年の闘い
中村哲 1600円
東京都渋谷区宇田川町41-1
NHK出版 電話03(3464)7311

税込表記のあるもの以外はすべて本体価格(税別)です

アフガニスタン DVD

用水路が運ぶ 恵みと平和

朗読 吉永小百合
3000円(税+送料込)



今年7月来日時、ブドウ栽培園を視察したサーブルジャン(ジャン=さん、ちゃん)。栽培法の説明を受けた後、新鮮なブドウや梨をみんなで美味しく頂きました(2018年7月31日)

主な目的は、水路流域及びガンベリ沙漠までの灌漑でした。アフガン人、日本人達全員が、悪化する治安情勢と過酷な気象条件のもと、一生懸命に働きました。そしてようやく、誰もが不可能と思っていたガンベリ沙漠に水を引くことが出来ました。私は一職員としてPMSに加わりました。当初給料は家族を支えるに十分ではありません。

二四時間体制で 一日二〇〇名の患者

PMSダラエヌール診療所医師
ハファイズツラー

私は、ジュマグルの息子のハファイズツラーで、ドクターです。PMS職員としてこの十二年間、ナンガラハル州ダラエヌール郡のPMS診療所で働いてきました。

アフガニスタンの公衆衛生省(MOPH)では、公衆衛生サービスを、①BPHS(ベーシック・パッケージ)と、②EPHS(病院が提供すべき必須医薬サービス)の二つのレベルに区分しています。BPHSには郡病院、総合保健センター、基礎医

せんでしたが、PMSの事業が効果を生んでいる事とアフガン人のために誠実に働いている皆の姿に刺激され、勤め続けました。アフガン国内外のスタッフと共に働けて幸せです。この組織の一員であることを誇りに思います。私はこれからも長く、PMSを通して祖国に奉仕して行きたいと思いません。

療センター、サブ医療センターがあり、EPHSには地域病院、州立病院が含まれます。

我々の診療所は基礎医療センターの部類となりますが、二四時間体制で住民の医療サービスにあたっています。また十分な職員数が揃っているのです。外来診療、看護、ワクチン接種、母子保健そして検査室の機能を持っています。

外来診療には私と私の誠実な同僚であるドクター・ハミドラーの二名がおり、毎日朝八時から午後一時の間に一日平均二〇〇名の患者を診察しています。季節によって疾病の種類も異なります。夏はマラリアや下痢、腸チフスが多いです。近年ではマラリアが最も多いです。冬は季節性の風邪、肺炎、急性呼吸器感染症が多くなります。看護部には看護師三名、アーベット氏、シャキール氏、マルーフ氏がおり、小外科

手術後の処置や外傷の手当て、点滴、注射などを行なっています。

母子保健部には助産師が一名おり、妊婦ケア、産後ケア、家族計画を担当しています。ワクチン部には担当職員が二名、グラムモハマッド氏とナシールツラー氏がおり、生後一八ヶ月未満の新生児にBCGワクチン、五種混合ワクチン、肺炎球菌ワクチン、経口生ワクチン、ロタウイルスワクチン、麻疹ワクチンを、また妊娠可能年齢の女性に破傷風トキソイド接種を行なっています。

検査室には二名の検査技師、ヨセフ氏とサイードマストド氏があり、生化学検査、ビダール反応、薄層クロマトグラフィー、DLC、ヘモグロビン検査、AFB塗抹検体検査を行なっています。

以上が我々の診療所の活動です。最後に、日本の皆様に御礼を申し上げますと共に、今後とも変わらぬご支援と友情をお願い致します。

▼未使用の切手、書き損じハガキ(官製ハガキ・年賀ハガキ)をお送り下さい

*引き出しの中などに眠っているものをお送りいただければ幸いです。会報発送等に使用させていただきます。なお、外国の切手は取り扱っておりません。

PMS訓練所の受講生によるトレーニングの感想

ナンガラハル州ホラサン工科大学

教員:ナスラットラ アマン技師

大学院生:ムハンマド ハミド技師/ムハンマド カシーム/ニアマットッラ/ナスラットッラ

本トレーニングは我々にとって大変効果的である。技師が複数のトピックを習得出来るよう、期間はもっと長い方が良い。技師達がPMS方式の知識を得、実際に作業を体験出来るよう、3ヵ月から6ヵ月に延長してほしい。

またトレーニング中、技師達に実践的な測定をさせた方が良い。実施時期は、PMS事業の実施時期と同じであることが望ましい。

ホラサン工科大学の学生にはこのようなトレーニングを毎回受けさせたい。なぜなら若い世代がPMS方式を体験し、将来この方式を実施していかなければならないから。

トータルステーションやGPSなどの測量機器類がホラサン工科大学にあれば、学生の実習が出来る。ありがとうございました。

ナンガラハル州^{かんがい}灌漑局

灌漑局長:ワヒードッラ

水分地質学技師:モクタール/アフマド アリ/アサドッラ

トレーニングに参加したナンガラハル州灌漑局技師達は、PMSのトレーニングは役に立つと実感した。以下感想を述べる。

このトレーニングでPMS方式を知ることが出来る。堤防、河川、取水口などPMSの灌漑システムを知り、これら灌漑設備建設の利点を学べる。FAOからも有用な情報が提供される。

PMS方式の灌漑施設全体を学ぶには10日間という期間は短い、FAOの農作物に関するオンライン情報が大変役に立つ。トレーニング期間を今より長くすることをはじめ、PMSとFAOに以下の点を提案したい。

- ・実践的な学習・作業を体験したいので、トレーニング期間を長くする。
- ・灌漑施設に関する必要な資料を準備し、我々が実際にそれらの施設で学べる時間を設ける。
- ・本プロジェクト後にアンケートを行って参加者のコメントを集め、トレーニングをより実践的なものにする。
- ・地域内に実践的演習の場を準備する。
- ・実地研修をやり易くするため、クラスを数グループに分ける。
- ・学習後、各グループに測定、設計、見積りをさせ、学んだことを完全に理解させ、各々職場に戻った時にPMS方式が使えるようにする。
- ・可能であれば、技師にコンピューターソフトウェアを使わせて灌漑の仕事させる。
- ・最後に、ナンガラハル州灌漑局はPMS事業を肯定的に評価している。将来的にはPMSの灌漑事業は全て共有され、灌漑局の技師達は等しく実践的作業をすることになるだろう。

◎ワーカー通信

不都合な真実^①に 向き合うために

PMS支援室

梶井孝文

十多岐にわたる仕事

ペシャワール会・PMS支援室に勤務して約一年半が経ちました。入った当初よりは幾分新しい環境と仕事に慣れてきました。PMS支援室の仕事は多岐にわたり、会計作業に加えミラーン訓練所で使用する技術書・DVDの編集、より多くの方々へ活動を知ってもらうためのDVD上映会・写真展の準備、等々があります。

一番頭を抱えるのは、仕事を行う為に蓄えなければならぬ知識が膨大だということです。ペシャワール会とPMSの歴史・水理学・パシユトゥール語・英語、どれも仕事を進めるうえで欠かせないもので、そしてすべて一朝一夕では身につけられるものではありません。仕事の中で室長の藤田さ

んや先輩方から指南を頂き、なんとか仕事をこなしています。

十環境問題を学ぶ

中村先生の助言により、支援室一同、最近では水理学以外にも広い範囲で勉強するように心掛けており、先生に薦めて頂いた本『不都合な真実』(アル・ゴア著)を読み進めています。この本には今まさに進行している環境問題がなぜ引き起こされているのか、私達の生活にどのような影響を与えているのか等がわかりやすく書かれています。

日本においても地球温暖化の影響により気温がだんだん高くなっている事を肌で感じますが、アフガニスタンでは日本と比較できないほど、地球温暖化の影響を受けているようです。気温が高くなる事により連鎖的に干ばつ、洪水など、挙げればきりがなほどの問題が年々悪化しています。彼らが置かれている深刻な現実と、私に出来ることを対比した時には埋めようのない差異に無力さを感じ、目を背けたくなってしまう時があります。

十家族の存在が励みに

そんな時に励みになるのは家族の存在で



事務局で、支援金を下さった方への礼状を書いている梶井さん

す。四人兄弟で、兄、弟、妹がいます。弟以外の三人はそれぞれ実家を出ています。帰省する時はいつも母親が駅まで迎えに来てくれるのですが、車の中で「子どもたちはみんな実家に帰って来たなら『他の兄弟は帰ってきてるのか?』、もし帰っていないかしたら『どうしているのか?』と聞いてくるよ」と笑いながら話していたのが印象に残っています。

兄弟とは仲良く頻繁に連絡をとっているわけではありません。それでも心の中ではお互いが気に留め心配し、その存在に励まされているという事に、その時気づきました。兄弟それぞれやりたいこと、やらな

2019年カレンダー

「磬・人・泥」

画・甲斐大策

同封のハガキでご注文ください

B3判変形(画・7点)+絵ハガキ3葉

定価 1500円(税・送料込)



今年も恒例のカレンダーが完成しました。部数に限りがありますのでお早めにご注文下さい。(ご友人・知人へのプレゼント発送も承ります) ※代金は後払い/払込用紙を同封します。 ※郵便・宅配物の規格変更でカレンダーのサイズが一回り強、小さくなります。何卒ご理解下さい。

ければならぬことに時には挫折し、それでも少しでも前に進もうと必死に努力している姿を身近で見えてきました。彼等のその姿勢を思い出すと後ろからおもいっきり背中を叩かれた気分になり、必要以上に悲観的になって悩み、立ち止まっている自分が恥ずかしく思えてきます。

地球の環境問題、アフガニスタンで起きている深刻な現実に対峙した時に自分には何も出来ないかと絶望せずに、責任を持って支援室での仕事、また、環境問題に対して自分が出来ることをわがかながらでもやっつけていければと思います。

▼寄付をしてくださる皆さまへ

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願い致します。

▼現地活動を紹介するパンフレットをお送りします

*ペシャワール会の活動をご紹介されるときにお使いいただけるものです(払込用紙がついていません)。ご希望の方は遠慮なく事務局にお申し越し下さい。パンフレットはA3変形を四折りましたもので、長形の定形封筒に入るカラー版です。なお、パンフレット、会報等は受け取る意思のある方への配布を原則としております(ポスティング等は行わないこととしております)。

サファル・バハル(良い旅を) チャプルサン

甲斐大策

35

一〇月初め、M・ダイヤと仏人の妻、コリン・ラヴィは、例年通り、フンザ西北端のチャプルサンに近い夏の住いを閉めた。指呼の間に望めるイルシャド峠から、アフガニスタン側ワハン渓谷に入り、冬の住居のあるクンドウズへ向う。水河からの融水で滋味豊かに育ったチャプルサンの夏草で、三頭の愛馬は充分に力を蓄えた。

M・ダリヤは、夏期、山岳ガイドやポロの能手としてフンザで暮し、冬期、温暖なクンドウズで、採掘権を先祖から受けついで、パミールの良質な岩塩坑からの収益を管理、それは生活費の足しにする位で、大きな収入は、ブズカシの賞金である。

妻ラヴィは、ソルボンヌで文化人類学を修め、中央アジア商民の系譜をテーマに、クンドウズに長期滞在の折、M・ダリヤと知り合った。巴里の富裕な良家育ちのラヴィは、自由を夢みる娘だった。ヴァガボンド、ボヘミアン、ジプシー(ロマ)、デラシネ、そして近くはヒッピー等々、世間の規範を無視する生き方に、定住を当然とする社会の側から呼んだ在り様に、学生時代から憧れていた。

金髪碧眼の騎士、それも古代の移動系騎馬民族の帝王の如く、夏の居所と冬の居所を往来するM・ダリヤに魂を奪われ、中世バルフで恋を貫いて獄死した王女で詩人のラヴィアにちなみ改名、ダリヤの妻となった。亜麻色の髪と茶色の瞳のラヴィがM・ダリヤと並ぶと、中世の古い世界の夫婦としか見えない。

夫妻と同じく、国境に拘泥しない、チャプルサンの草や水を分け合ってきたキルギスのヤク牧民達に別れを告げ、三頭の馬達とワハン渓谷へ向う。そこでは、パミールから下ってきた美しい装束の北方系移動民の、二つ瘤駱駝のカラワンもまた、東へ向って谷を降りている筈である。

●事務局長便り

* 中村医師の緊急報告にありますように、アフガニスタンとその周辺国では、大干ばつが進行しています。国連関連機関もこの春から干ばつの警告とその被害状況を発信し始めました。アフガニスタン三四州中二〇州以上が被災し、人口三〇〇〇万人のうち推定一〇〇〇万人が干ばつにさらされ、一部は難民となって村を出ています。異常気象の被害は干ばつだけでなく、集中豪雨による洪水も発生し、マルワリード水路の一部が二度にわたり寸断されました。中村医師によると、集中豪雨はきわめて短時間に起こり、数時間から数十分のことあるとのことです。干ばつと豪雨が同時に起こると、異常気象が常態化しているなかでの水路建設とそのメンテナンスですが、PMSの灌漑システムが唯一の備えであることが、この一八年で実証されたといえます。止むことのない異常気象に備え、避難民の発生を抑えるためにも、PMS方式による「安定灌漑地の拡大」が必要とされています。日本側も心して現地を支えてゆきたいと思えます。

* 一月一日〜一七日まで、PMSのジア副院長他三名の現地スタッフが来日して、朝倉市で測量や農業の研修を受けました。また一六日には、中村医師とジア医師が、PMS一八年間の活動報告と現地の大干ばつの現状について訴えるため、記者会見を事務局で行いました。その後は、PMSスタッフと日本側関係者との懇親会ももちました。会を重ねるごとに、人間的な親交を深めることになり、現地事業を進める上で不可欠の取り組みとなっています。朝倉市での研修につきましては、関係者の皆様のご協力に深く感謝致します。

* 今年、日本でも地震や豪雨に台風と大きな災害が発生しました。私たちも日常化した災害への備えをすることも、来年が皆様にとって穏やかな年になることをお祈りしたいと存じます。

●PMS支援室より

* 海外メディアが報じたアフガニスタンの干ばつ状況の記事を読み、干ばつの顕在化でPMSが緊急事態対策として飲料用井戸を掘り始めた二〇〇〇年当時より、近年の方が厳しい状況であることに驚いています。今号に掲載したPMS活動地以外の州のひび割れた畑やジア医師がこの十一月に日本へ持参したテントで暮らす国内避難民の写真は、これまで中村医師の報告で何度も何度も耳にしていた「干ばつは進行中」の実態であり、声が出ませんでした。隣国からの難民帰還に加え干ばつによる国内避難民も相当な数になるとの報道もあり、すでに冬を迎えている首都カブールや他のキャンプでテント暮らしをしている人たちに想いを馳せています。

②村から

* 昨年仕事を引退し、無職であったことのない私にとって、あり余る時間をどうするかは大きな問題であった。以前から持っていた途上国にシニアボランティアで行くという夢は応募の結果すでに潰れていたが、ボランティアにはまだ関心があった。友人の知り合いがベシャワール会でボランティアをしていると聞き、それまで中村哲さんのことは尊敬していたこともあり、やってみることにした。オフィスも近くで、早速礼状班に参加することになった。少しでも素晴らしい仕事の手伝いができるという喜びを感じながらも、手を使つて書くという、最近では使われない機能を使うことで大脳の活性化にもつながりますますやりがいを感じている。(MS)

会 則

- ① 本会の名称をベシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州（現パクトゥンクワ州）ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な広報・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。
- ⑦ 本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。
- ⑧ 毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。
- ⑨ 本会の事務局を
〒八一〇一〇〇〇三 福岡市中央区春吉
一―一六―八 VEGA天神南六〇一号
TEL 〇九二―七三二―二三七二内におく。

総会、現地報告会は、原則として六月の第一土曜日に開催いたします。